

小児のかぜ

もとはしクリニック 本橋和夫 先生

かぜは、鼻腔、咽頭、喉頭までの上気道に急性の炎症を生じる病気の総称です。原因となる病原体のほとんどはウイルスで、その他ではマイコプラズマ、クラミジア、細菌などによる感染があります。

かぜを起こすウイルスは大きく分けると人種類程ですが各々を血清型という方法で細分化すると200以上の型に分けられます。また、これらの感染症の多くは、インフルエンザに代表されるように免疫の獲得が不十分で、再感染を起こしやすいという特徴があります。このため、毎年いくつものかぜが流行します。けれども、成人までに再感染を繰り返すことによって、ある程度の免疫を獲得して、かぜをひきにくい、あるいはひかない状態になります。

小児期のかぜが重症化する原因には乳児期、とくに6ヶ月以下の子どもの免疫力が低下していることと、小児期にかぜの初感染を受けやすいことが挙げられます。生後6ヶ月以下の乳児では、本人の免疫力は成人に比べてかなり低下しています。けれども母体の免疫力の一部である抗体が臍帯を通じて移行しているために、母親が以前かかった病気のいくつかは防げますが、母親がひくかぜは、やはりひいて、重症化することも多くなります。

初感染時に重症化することが多いといわれる代表例がインフルエンザ脳炎・脳症です。A香港型の流行時に5歳以下に多発し、発熱後2日以内にけいれんなどの神経症状が起こり、数時間から数日で死に至ることがあります。死亡率は30%前後。流行期には数100人の患者が出るといわれているこの病気も、インフルエンザの初感染時に生じると考えられています。

大人のかぜが子どもでは、かぜで終わらないことがあるのは事実です。実際にかぜにかからないことは無理ですが、かぜの流行時、特に乳幼児は人混み等を避けていくつものかぜをもらわないようにすることと、ひきはじめに注意して悪化させないようにすることは必要でしょう。
